

不登校であった自閉症スペクトラム症の小学2年生の児童が楽しく学校生活を送るための取組

1. 事例の概要

A児はB小学校の2年生で自閉症・情緒障害学級に在籍している。算数、工作、自然科学分野に興味関心が高い。A児は、規模の大きいC小学校の通常の学級に入学したがうまく馴染めず、小学1年生の2学期の運動会が終わった頃から、学校に行きたい気持ちはあっても登校できなくなり、1月にB小学校の特別支援学級に転入した。転入にあたって、保護者はB小学校に相談し、A児と学校や特別支援学級の見学をした。また、学校に対して、楽しい学校生活を送ってほしいことと自己肯定感や協調性の育成、こだわりへの配慮について希望した。

B小学校では校内支援委員会や全職員での研修を行い、A児の障害や、B小学校の特別支援学級に転入した経緯、A児への対応についての共通理解を図った。また、A児が1日の見通しをもてるように、1時間目を国語にし、個別の指導を行っている。これらの全職員での丁寧な言葉掛けや対応により、A児は学校で終日過ごせるようになってきた。

キーワード コミュニケーション、対人関係、自己肯定感、交流及び共同学習

2. 児童の実態

A児は、B小学校の自閉症・情緒障害学級に在籍する2年生である。A児は6歳の時に、自閉症スペクトラム症と診断された。A児は、最初、規模の大きいC小学校の通常の学級に入学したがうまく馴染めず、小学1年生の2学期の運動会が終わった頃から学校に行きたい気持ちはあっても登校できなくなり、B小学校の特別支援学級に転入した。当初は、共感性に乏しく周囲に配慮しない言動も見られたが、現在は、何をどのようにすれば良いかを理解すると集中して取り組めるようになった。算数や自然科学的なことや工作、絵を描くことなどには興味関心を持っている。

3. 本事例に関する基礎的環境整備

- B小学校の特別支援学級担任は、B小学校のあるD市教育委員会で実施される特別支援教育研修会に参加したり、夏休みを利用して指導力向上のため研修会に参加したりしている。また、校内研修で研究授業を行い、同僚の意見を参考に授業改善を図り、A児の指導が充実するよう心がけている。【基礎2】
- D市教育委員会は、特別支援学級担任や特別支援教育に関係する教員に対して研修を行っている。また、市内の全ての教員が特別支援教育に関する理解や認識をもち、専門性や指導力の向上を図るための取組をしている。【基礎6】
- D市の各小学校や中学校では、特別支援学級と通常の学級との交流及び共同学習を積極的に推進している。B小学校でも特別支援学級に在籍する児童は、それぞれ

の状況に応じて通常の学級と交流及び共同学習を行っている。【基礎8】

4. 合意形成のプロセス

A児の保護者から「集団生活で皆と一緒にのこをやる目的と意義は十分理解しているが、A児の特性を考慮して必要なときは特別支援学級で過ごす時間(クールダウン)を設けて欲しい。」「A児の自己肯定感を育み、学校で毎日楽しく過ごして欲しい。」という支援の申し出があった。そこで、B小学校の校内支援委員会で検討し、自閉症・情緒障害学級担任と交流先の通常の学級の担任を中心に全職員がそれぞれの立場でA児を見守ることを決めた。また、A児への支援については、保護者と協議し、合意形成を図りながら進めていくことにした。

5. 合理的配慮の実際

- A児の気持ちを確認しながら、少しずつ学校生活に慣れるようにした。また、家庭と連絡を取りながら全職員でA児に安心感を与えられるように心掛けて接した。
【合理①-1-1】
- A児は不登校であったため、漢字、カタカナ、音読、作文等については遅れがみられ、A児も自信がなかった。そこで、毎日、1時間目を国語にして個別指導を行い、A児が1日の流れを理解し、落ち着いた生活と学習のスタートができるよう配慮した。授業の流れをパターン化して明確に示すことで見通しをもたせた。教科書の音読は、担任と交代しながら読み進めるなど集中して取り組むことができるようにした。【合理①-1-2】
- 交流先の通常の学級では教室全面の黒板左端に今日の時間割を示し、A児が1日の時間割を視覚でとらえやすいようにしている。また、特別支援学級では、教室前面の小黒板に自分で1日の時間割を書き、朝から今日1日の時間割を確認できるようにしている。【合理①-2-1】
- A児が見通しをもって学校行事や学年行事に参加できるよう、前年度の行事のDVDや写真などを用いて、担任が事前の指導を行っている。【合理①-2-1】
- A児の発言が周囲に誤解されたときやA児が他の児童の発言を理解していないときには、交流先の通常の学級の担任と特別支援学級の担任が中に入り、A児と他の児童の発言が理解できるように話している。【合理①-2-3】

6. 本事例の成果と課題

A児は、小学1年生の1月にB小学校の特別支援学級に転入以来、欠席もなく、学校生活を送っている。A児への対応について教職員で共通理解し、特別支援学級担任と通常学級担任が中心となりA児を学校生活に馴染めるように配慮したことによってA児が登校し、学校生活を少しずつ楽しめるようになってきたと考えている。